

色鮮やかに咲き誇る

ふじの里の寺

匠 探訪

— 48 —

サクラからフジ、ツツジの季節に移り、市内の里山も新緑につつまれるようになりました。5月に「ふじ祭り」のイベントを行ってきた「木積（きづみ・豊栄地区）・ふじの里」も昨年3月に「木積藤箕（み）制作技術」が国の重要無形民俗文化財に指定されたことで盛り上がることでしょう。

「ふじ祭り」は平成10年から行われているとのこと、300年ほど前の江戸時代中期・元禄時代に「加納（かのう・叶とも書く）おせん」がこの地域に農具の箕作りを伝えたという伝説をもとに祭りが始まり、それに合わせるかのように技術の継承にも目を向けられ文化財指定となりました。

同地区には、樹齢700年以上とされる夫婦杉のある白山（はくさん）神社と隣接する龍頭（りゅうとう）寺の大フジ、少し離れた高台に3色大ツツジで知られる圓實（えんじつ）寺があります。

龍頭寺は寺の名と結びつけられ、龍にまつわる寺とされていますが、大寺・龍尾寺のように伝説を裏付けるような記録はまだ見つかっていません。むしろ同地区に伝わっている新田義貞（にったよしざだ）の家臣移住伝説を裏付けるかのように1363年の年号が刻まれた板碑（いたひ）

が発見されました。龍頭寺から坂道を登ってたどりついたのが、竹林に囲まれたツツジが見事な圓實寺です。山寺の雰囲気につつまれた日蓮宗の同寺は、同村で生まれ飯高檀林で学んだ日顛（にちぎ）という高僧が師匠を開山（かいざん）寺を開いた者」として建てたと考えられます。

境内には安産・子育ての七面（しちめん）堂や癩瘡（ほうそう）・天然痘（てんぜんとう）神をまつた「妙正（みょうしょう）大明神」、近隣14か村の信者により建てられた眼病守護の日朝（にっしょう）供養塔、痔（じ）の守り神などがあります。

明治17年秋には、この寺の本堂で自由民権運動の集会が行われました。同村の越川、佐久間姓の民権運動家が近隣から数十人を集め「酒たけなわにして演説の雄弁を戦わせ余興もあって盛大だった」と当時の新聞で報じられました。取材で訪ねた折り、見物者受け入れを前に境内清掃していた人によると、今春の天候不順でツツジの見ごろは5月中旬ころになるのではないかとのことでした。



3色大ツツジで知られる圓實寺